

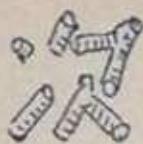
漢文

No. 8



(1958.4.—6.)

渓穀8号

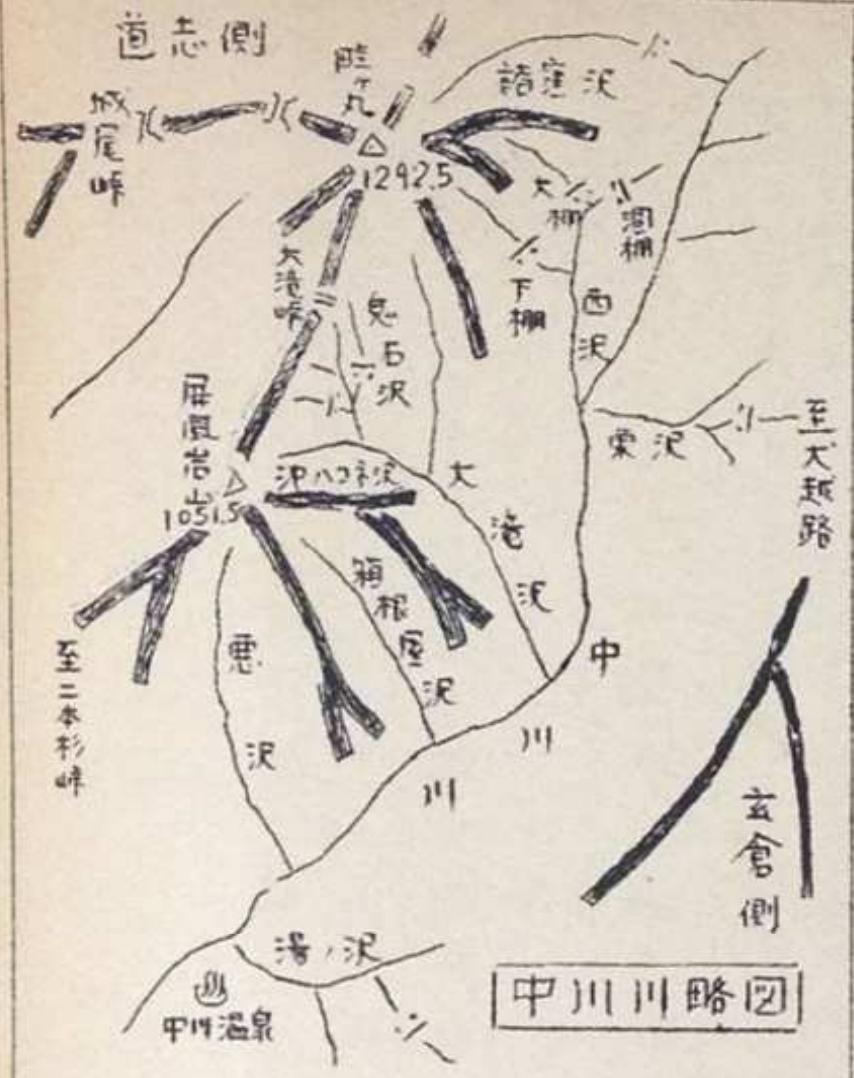
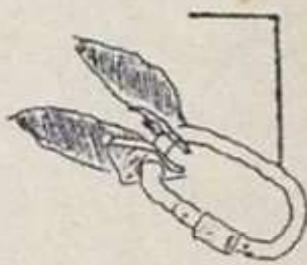


- ▶ 西丹沢-中川川合宿 4 (2)
- 箱根屋沢 柏浦 哲 (3)
 惡沢 高須賀 重行 (4)
 惡沢F1登攀 村田 俊満 (5)
 下棚F1登攀 村田 俊満 (5)
- ▶ 西丹沢で拾った話 (8)
- ▶ 西丹沢モチコシ沢 4 亀江 賀之 (7)
- ▶ 雜想 K・T (8)
- ▶ 武甲山一オ3回関東地区登山大会 4 野田 靖子 (10)
 小林 敏子
- ▶ 凤凰紀行 4 近藤 澄江 (13)
- ▶ 詩—さすらい。雷鳥のスケルツオ。今日も。 (18)
- ▶ 白毛円山 4 (18)
- ▶ 白毛円沢 4 山縣 昌彦 (19)
- ▶ 書くということ M・Y (21)
- ▶ 尾瀬 — 水芭蕉をたずねて — — 斎藤 良夫 (22)
- ▶ 仲間を語る — 村田 俊満君 (24)
- ▶ 山と女性 筒井 満栄 (26)
- ▶ 谷川岳-の倉沢
- 中央壁 斎藤 良則 (28)
 5ルンゼ 柿沼 博 (31)
 △ルンゼ (33)
- 口山話会の記録 (27)
- 口編集後記 (34)
- 口表紙 梶崎介二

西丹沢

中川川合宿

5月3日
～5日



中川川略図

○ ○ ○
中川川合宿は過る五月の連休を利用して、中川温泉に近い湯ノ沢出合にベースを置いて行なわれた。

我會にあつては連休でも心うしも余裕のない会員の島に、日帰りでも可能な处を合宿地とする建前から、当初は例年通り谷川基合宿が考えられていたが、此の連休の谷川は空前の人出が予想され、又今回の合宿は雪渓技術よりも岩場の基本技術の習得に重きがあられたので、如くは中川川合宿へと振り替えられたのである。

さすがの連休も中川川は静かだが、それでも湯ノ沢出合から箱根屋沢までの河原にはいくつかの合宿テントが散在した。

今回の合宿は今年度に於ける会員全体の総合的基本技術習得の第一歩として、会全体に呼び掛けたに反し、参加者が予想よりも少なく結果的に新人練成の形になってしまったが、それぞれの能力に応じた登攀を行ひ得たので、その点に於いてはバラエティに富んだ合宿となつた様である。なを今後此の地域への入山者の増加も予想されるので、我會では屏風岩山周辺の沢及び尾根に、さりやかな道標を設置した。

へ参加メンバーへし、辻勝四郎、村田俊満、岸原健二、滝沢広保、小山田俊明、柏浦哲、高須賀重行、以上7名

才一日（五月三日）（昌雲）

三井相銀屋沢

一柏浦 哲一

村田、滝沢両君の他は、朝食の後トレーラーに湯ノ沢入り中俣を溯行して九時四十分ベースに戻る。しかし皆テた林子もなく非常に元氣である。十時十分中川温泉着バスで村田、滝沢両君を迎える。

腹ごしらえの後、続勢七人そろってベースを離れる。トツフ道をのこりと箱根屋沢を目指して進む。三十分位行くもそれらしい沢がなく地元の人間に聞いて、又元来た道引返す。辻、村田両さんが沢の入口で待つていた。全く平凡な様子をしている沢である。沢筋は非常に狭く跡跡に導かれて左岸をいく。うつそつとする稚不で両は包まれ小滝やトロが連続し、やがて若菜の向から二十程の滝が現ゆれて来る。三段になつて直登は仲々難かしく見える。辻さんの確保で取付きにしぶき滝壺石手からしぶきを浴びて順次直登、落口に出て今度は各自確保の地練習である。

数米の滝が次々に現われるが、それぞれの直登は岩が脆くと言つても表円沢の称な捲往はない。しばらく転伝へに行くと、二十メートルの滝がスラブを一気に流れ落ちて水。水量は豊かである。ここで初めて三ツ道具が出され

ます村田さんが腰に三ツ道具を着け、右壁を登り途中から滝心へ二米程トラバースしてハンク状を慎重に乗り越し、更に登つて一枚岩にハーケンを打込む。真に快よく歌う。それから落口まで一気に登る。続いて各自確保されて登る。滝場でありながら乾いた一枚岩なので快適な登攀である。最後に辻さんがハーケン抜き作業に取掛つたが、良く効いているのか遂に抜けず「打方が悪いな」と言ひながらも、あきらめて登つて来た。

箱根屋沢隨一の大滝ニ十五メートルは下部がオーバーハングしているが、村田さんが滝の中央部をバンド伝いにトラバースして上部のスラブを右手に羽つて越す。猿原、高須賀がこれに続く。

沢は依然として狭く、振り返ると滝場の連続のたのか沢は相当な急峻さを持つて両岸の新緑の中を落ち込でいる。いくつかの滝を次々と直登、ルートもそれなく技能に応じて自由に採るが、場所はがむしやらにルートの判断もつかぬうちに登り始めて途中でつまつたり、滝沢が藪の中を上へ上へと捲いてしまつて、上と下で応答し合つたりする。

次第に水量が少くなり、をも進むと沢が二分して右の岩渦状を成している五メートルの滝に出るが倒木があり、この上を四人ほどの間では、登り、さらに小滝を流れにひたりながら越えていく。いよいよ水がなくなつて来た

暫時休憩して昼食をとる。ラジオを靴に履き替えて、始めること急にあたりは明るくなり、前面に大きなガレオレしおしが現われる。一列になつてか左の藪の中をふさかに登る。ひどい藪を分けて尾根を一時も歩いたつか、やつとまわりが届けたピーチに出る。

展望は良く巨木の切り倒しの向うに道志の山塊が顔を出している。此处では我念の道標が屏風岩山まで約七分と教へられる。

屏風岩山に出て小憩、下りは二本杉峠と反対の大滝峠へ

社を東左する炭焼の煙りを眺め乍ら駆る林に下つた。

(ソイム)

F2(発生時十五分) — F1(十二・五) — F1上(十二・三五) — F3(十二・四〇)

入柵(十二・三五) — ヤブ入口(二・五〇) — 屏風岩山(四・二〇) — BC(六・一〇)

オニ日(五月四日)

悪 汗

— 高須賀 重行 —

上りで山林はしつとりと濡れており、大変泥登りには心持である。出合に立つと前方にF1が見え他のパートナイルを使ひ是が良さそうに登攀を行なつてゐるところあつた。F1は時間的に残念やら登る事が出未ず、左手

レ場から落口に出る。登り切つて見るとあたりは明るく

泥は流れ新が沢山積んであり、出力が出入りして

いるのか、山は開けている。

F2附近は両岸が切り立つた険渾なところで、急に冷え冷えしてようやく沢に入つたという感じを受ける。こゝで我は辻、村田さんと別れ、F2、F3を高巻くと程なくスラブを一気に滑るF4が目前に聳える林に立ちはだかる。この沢に入つて初めての直登なので慎重に登る。下部の滑りやすい濡れた岩から石手の砂地を帶びた丸に入る。足が自由に進まずサイルを使用してかろうじて落口へと迷かけげる。

濡れた二、三の小滝を越えていくうちに沢にも次第に朝木んと来て急ピッチで次々と滝場を乗り越えていく。

三十米の大滝はサイルの練習にもなるので、サイルを使用して登つたが、苔で滑り容く、又、スタンスがこまかいで困難を感じた。

スタンスのとほしい滑滝を次々に快適に水呑浴び下り直登、次々に水勢もあとろえて来る。最後のF1を登り終えたところで小休止して、いよいよ木の無くなつた二俣より右のガレ状を躊躇する。此處は非常にくづれ易く、落石の連続である。バラに注意しながら藪を分れる事三十分、枝詰に出て霧の中を屏風岩からニ本杉峠へと下つた。

(ソイム)

BC(十三・〇) — F4(十二・十五) — F8(十二・四五) — F1(一・〇七) — 中食(一・三)

屏風岩山(二・二〇) — 四〇) — 二本杉峠(二・一〇) — BC(三・四五)

悪沢 F2 登攀

—— 村田俊満 —

悪沢F2は西丹沢でも有数な悪場の一つである。四日は朝から雨が降つていて、停滯、と思つたのも床の間。八時頃雨も止み晴れ向が見えて来たので、簡単な朝食の後ベトスキー、六人はかりで取付いているのに出喰わす。待つ時間も惜しいのでF1は割愛し先を急ぐ事にする。

F2は広下狀に狭まつた両岸の間を水量豊かに落下する陰元な称相の棚である。左壁は濡れた手附きのないスラブでF1は广下狀に狭まつた両岸の間を水量豊かに落下する陰元な称相の棚である。左壁は濡れた手附きのないスラブで

一休みする。

さて充分な休息の後、愈々直登を開始する。サイルは30分、右側テラスで私が確保。トップはあくまでファイトマンの丁さん、オーバーハンク乗越しに念の為、二段アーチを

持つて登る。

テラスから一旦途中まで

アーチを下りてこから左上に滑り島、細いバンドをトラバースする。このバンドが社切り頭と上部が悪相な



オーバーハンクのアーチで、この棚登攀の鍵である。ハンプ下部右側に一本ハーベンが打つてあって、うしく、カラビアを掛けザイルを通す。このハンプ上部は岩がもろく、ハーベンは打てそうもない。暫らくハンプ下からホールドを求めていたが、悪、切つて腕力で乘越を試める。一回目乗越に失敗、一旦ハンプ下部まで下り、次の機会を待つ。

振り返ると何時の間にか棚の下方には見物人が垣を成して見ものとばかりカメラを向ける御人もいる。こう見物されてはかなわんと丁さんは長期戦をきめ込んで、ハーベンにぶら下りながら一服を始める。

さて順合を見えて次二回目、両手をクラックにこら入れた丁さんの体がじりじりと動き出す。息を殺すうちに今度は無事ハンプを乗り越し上部テラスに立つ。このテラス上部はなにも嫌な草付とスラブの交った壁が続き、これを右手から微妙なハラシ入り壁としてようそくの第で落口に出る。この間ニピツチ、二人で一時半十分を費していた。

才三日(五月五日) 晴

下棚 F1 登攀 — 村田俊満 —

昨日は雨に降られた西丹沢合宿も今朝は雲一つない、五月晴れとなり、遙かな山間に鐘懸りが上ると、うのどかな山

景が望めるベース・キャンプで合宿最後の朝食を取る。叶衣四人帰京したのでメンバーは三人になり、今日の下山の予備知識を丁さんから聞きベースを出発する。中樹齡二千年と、われる帝杉などを見物しながら九時半出合着。こゝからトレイル路から別れ左より入る西沢止む。約十分で下棚下一下に出る。

の棚は正面から一見するとスラブ状の垂壁で、直登は可能に思われるが直下から見工みると何とかルートはどうである。約五十分、登攀準備ヒルート選定に時間をかし、丁度十時登攀を開始する。

十五歩を一気に落ちる此のスラブ状の左壁は、見掛けは異なり取付いてみると案外にもろい。トツフは一步一石を確かめて登る。中间部に二ヶのテラスがある。

トツフ丁さん殆んどタイレクトに上部へと攀じ、約四十度前して初めて地のバー・ティに遭遇した。未だ玄倉から鞍部へと登山者は少ない様である。バスは此の四月から中川自己確保のバー・ケンが打たれ丁さんのジフ・ヘルで私が後援する。テラスに移るがホテルが全くなく、苦労する。から見て充分なテラスと思つたが、いざ登つて見るとは信玄館一軒だけ、温泉もこの春から新たに二軒増設され一般には中川川は新らしい山の湯としてフローズアツフされて来ている。なる今年歩いて判った事だが、屏風岩山へと共に一休めして一腋中、突然物すごい落石に会つて冷す。幸いかすり傷も負わなかつたが、落石などといほどのほどんな事に起るか判らないものだ。

さてこのテラスで私が自己確保、丁さんが又登り出す。右斜上のリゾベに出て、ニキツの一放岩の基部に出る。この壁上部には打たれたバー・ケンがあるので丁さんこれに二段アーフミを掛けて慎重に乗り越し、それをも上部にバー・ケンを打ち込む。この上部の壁は下部以上にもろい草付混りの嫌な处で浮いた草付をホールド、スタンスに慎重にのし上ると落口下五米程の完璧なアラスに出る。

何時も覺えられるあのアンサインの安心感から、私もすぐ後に続き登攀を終る。

(前零時間 ニ・ピ・ツチ 2時間半、使用バー・ケン77本)

(註) 中川川の近況

今日は我會としては三度目の中川川入りであつたが、一度にして初めて地のバー・ティに遭遇した。未だ玄倉から鞍部へと登山者は少ない様である。バスは此の四月から中川自己確保のバー・ケンが打たれ丁さんのジフ・ヘルで私が後援する。テラスに移るがホテルが全くなく、苦労する。から見て充分なテラスと思つたが、いざ登つて見るとは信玄館一軒だけ、温泉もこの春から新たに二軒増設され一般には中川川は新らしい山の湯としてフローズアツフされて来ている。なる今年歩いて判った事だが、屏風岩山からの帰路は大滝峠を越して下る径は整備されて歩き良いが、ニ本河岸への径と較べると遙かに長く、時間的には全然不利である。新松田一中川温泉バス料金100円

西丹沢

王ナコシ沢

〈4月11日〉

之江 資



ヘメンバー、レ・辻勝四郎、亀江資之

前日小川谷でかつて座験した車のを、猛烈な散歩を行つたが、疲労が未だ相当に残つており体の調子は余り良くない。午前九時簡單な朝食を済せテント「小川谷出」を出る。玄倉川沿いに切開された林道を約一時間程で走る。トネネルに当かる。こゝから河原に下降し、ワラジを渡りかえて玄倉川を溯行する。春浅い沢の水は冷く、何となく緑返す波も仲々樂いはなし。両岸が切り立つてゐる頃、左手よりモケコシ沢が合流して来る。

狭いゴルジニを左からへると詰に聞く二段六十本のF形の壁間に立ちふさがる。すぐ脇に比較的新らしい墓標があり、立つてあり去年度に犠牲者を出した事を物語つてゐる。手立つてある。木立つてあり今まで三十木ワイルが一杯ある。ホーリド、スタンス共に當にありてして困難では

ないが岩が非常に多い為慎重に登る。釜は大きなテラスを藏して、水は飛沫を上げてみふれている。上段を見上げると下段よりはるかに高く、水を浴びての登攀を強いらしかつてある。ルートを初色したが一寸ファイトも湯かな、丁さんの今日の目的はこの棚の直登にあつたらしく、大がこう条件が悪くては残念とくやしがる。テラスを右にトラバースし元な越境を登る。高度感があり相当なスリルを味う。稚木を押し分けこの大樹のすぐ上有る小滝め上に下る。向も無く右手から福山沢が入つて来る。

いくつかの小滝をすぎると再び沢は二分される。右側が水量も多く本流である。やがて沢は危に狭まり正面にチムニー状の小滝が現われる。こゝではチムニーの右壁を登りそのまま尾根状の凸地を登る。右手にはなをも沢が続いて大樹が二本落込んでいるがそのまゝ尾根の越境を行く。やがて丸々風化したサレをすぎ径は再び水もなくなり沢へと下る。向もなくかれは二牛に分れ、いよいよ西丹沢特有の萩こぎの序曲が始まる。やがてそれが導入部に入り、物すごいクライマツフスに我身を充れろ吸、ホツカウと聞けたモチコシの頭にとび出していた。すぐ前にあの通いなれた馬鹿尾根が長く遠く霧の中に続いていた。

ヘタイぐ B.C.(九〇〇) — Eチヨン沢出合(十一〇〇) — 乗越(三〇〇) — 中ノ沢路(四〇〇) — B.C.(五〇〇)

ことである。そしてそう言う事は山に限らず、我々が実生活に於いてしばしば犯す誤うなのだ。

相
才

九
茶



南ア塩見岳の麓の営林署で、山好き一人の署員が言つた。

「あまり蓮難くとさゆぐのでどん山かこわざく出掛けてみたけど、川岳つてのは大した山じやないな。んな山だつたらこの南アルプスの方余程山は深いし、怖がないさ」

大島亮吉がこんな事を言つていただけ。「ひとりで山を歩くものにとつて焚火はもつとも無ひで、しかも陽気な伴侶である。心こびい時は火をもやせ、その陽気を瓶をみつめよ」。

近頃の称に装備が発達してみると焚火を用いる事も少なくなる。殊に少人数の縦走登山には殆んど例外なくラジュースが使われてゐる。私自身も宝にしてラジュースを用ひるのだが、

便利なだけで火本体の味がない。

焚火は、いつもだ。特に單独オ折子ジラジユースの燃焼の音の途絶えた後半感するあの妙に空々し、虚ろなものになえられな私は、テントの傍で豪勢な印象を南アと同じ尺度で計ろうとする限りを、私は何等指摘する事もなくつて聞いていた。

山をあらゆる角度から見て、その本姿を正確につかむ平はむづかしい

中川川で拾つた話

中川一帯の沢に入ると大なり小なり藪を漕ぐので湯に入ると手足がヒリヒリと沁みて来る。時には手で藪を分けるのが面倒になると、いのしひ然として頭を前進する御人も現われて被害が手足ばかりでなく面相にまで及んで来る。こんな萩漕きで、ハ年配のオッサンが派手に面にミミズバレでも作ろうものなら、「ああ野郎山の神と一緒に交えたんぢやありぬえか」と氣を回される事にもなる。

二足のワラジを地で行つた男が居る。靴を毎度く尾根まで背負ひ上げるのが面倒になつたK、ワラジ履きの休テントを出た。ヨメてみる。かくして沢をつめると彼は相棒の脱ぎ捨てたワラジをマフルに着用に及ぶと、スターと藪徑を歩き出した。ものである。講談でも浪曲でも二尺

だ。それは自然に融けこめない苦痛さ、
小さな自分から逃れようとするはかない、
示威と言ふよりも、もつと本領的な自
然の勧説への憧憬なのだろう。

或る時、山の中で草木を抱えて歩い
て、いる植物採集の友の姿を見ながら
「俺達は山に登るのに一番つまらな
い歩き方をしている。たゞ疲れう為に
歩っていろいろなかくな」

「俺達は山に登るのに、がむし
て、山の美しさを心の中に吸收入れる
余裕など持ち合せなかつてもうかも知れ
ない」

その頃の俺達には、山に登山以外の
何の目的を持つて登つて、いた地質学者
の卵や植物採集の男よりも俺達の方が
登山の不道として、もつと純粹でひた
むきだつた事に気が付かなかった。

あれから何年かたつた今、よ、お
前は登山をどう考へておるだろか。

映画「遭難」を見る。画面は終始非
情な遭難の実体を生きしく描き出して

いたが、見終つた後になにも長く私の

脳裡に刻み込まれたのは、意外にも二
つの映画の企図したテーマから離れた、谷
川岳の美しさだつたのである。この山
に何年かの付合いを持つて、いる私にと
つてもそれは新鮮なおどろきだつた。

「何年か、唯岩を登る為にがむし
やうにこの山に取付けていた私には、

山の美しさを心の中に吸收入れる
余裕など持ち合せなかつてもうかも知れ
ない」

「遭難」と言えど、息子がよく行く山
が映ると聞かされて、泣かされて見て
帰つたあ小くろが一あんな危険へは
行くんじゃないよ」と説得する様に言
つて行きました。止り得ずMともも
入りました。

今日の日暮は敷きござの傷には草に
なりましたが、日下は少し青々とした
所でした。

「山登りをんかそのうやめるさし。
そんな付合の言をいながら、私はこそ

こそと又山へと逃げ出すのだ。

の「ラジ」を寝ぐ男は最後に千クリと
痛目に合う。御多聞にもかす我等
が二足ラジ氏も最後に来て
チクリと足をさされて
「痛て、痛て」。

夏山に備えて

葉の御用は

「龍沢薬局」へ

武甲山

第3回関東地区登山体育大会

参加報告：野田・小林記

〈期日〉：5月10~11日

〈メンバー〉：大武昭雄、斎藤良則、星野光基、小林敏子、野田靖子。

去る五月十一日、オ三日関東地区（関東一都六県の他に静岡県参加）登山体育大会が、秩父武甲山（一三三六・一メートル）に於いて盛大に行われた。

矢継がらも浦和市岳連の一員として役員として大忙しか走ばれ、その他四名がこの大会に参加した。

猶お、宿泊その他については斎藤氏に格別の便宜を計っていたので大変助かった。

オ一日（晴）

野田靖子記

14.24	
大宮	↓
熊谷	↓
お花畠駅 16.55	

大宮で列車が混んでいた為、一列車遅らせて秩父お花畠駅に着くと、しびれを切らせながらも大武さんが待つていて下さった。すぐ前夜祭の会場である産業館に入り受付をすませる。百円

と引き換々に大会のプログラム、記念の暖簾、前夜祭の入場券、キャラバンシユーズの抽選券、紅白の餅等が渡された。勿論男性の偉大な胃袋には、このさ、ヤケハ餅は忍ち安ど消してしまった。

五時半、今夜の宿である斎藤さんの親類の宅に行く。市内の大通り面した二階建ての機屋（みやけや）である。二階に通され一息ついてから斎藤さんの案内で工場を見学させていたい。

何やかやしているうちに、前夜祭の始まる七時になってしまったが、私はまだ食事をしていない始末。男性は食事前に御馳走にはつたヒールをかきいたのが腹が重くなり、結局会場に着いたのが八時過ぎ、映画も抽選も終って秩父音頭をやっていくところについた。このあと有名な秩父屋台囃を聴いて、なこやかなうちに九時、前夜祭が終った。念のため抽選

を確めてみたが残念ながら私達は誤り当つていたがつた。

宿舎に帰つたがなかなか眠れない。

夜の更けのもの忘れて詰に花を咲かせていたが時計の針が十二時を回つたのに驚いて目をつぶる。明日の起床は五時半のは一寸ユーワン才と私達女性だけは一人別々の蒲団をいたゞいてやっくり眠れるのは有難かった。

オニヨ（曇後雨）小林敬子記

7.40 8.30 11.50 13.10 14.10 15.15 16.21 18.50

神社
父→古↓
根山
→飯橋
屋→盛平
→鍾乳洞
→山口
→大浦

五時起床、昨日の晴天にひびかく今日は雲が低い。早々に仕度を整へ、いうくの御世話にながら感謝して

家の方々と別れを告げて株父神社へと向つた。七時開会式、神主のノテ

ト、オハライ、市長さんその他の挨拶で入山式を終り、登山委員長清水武甲

氏の指揮でBコース隊（表参道）、A

コース隊（裏参道）、Cコース隊（ウ

／岩尾根）の順にフラスハントを先頭に産業会館まで例の市中行進に移る。

各岳連毎に会旗を掲げ、六百余人の行進、浦和共運はBコースの二隊である。

羊山公園でA、C隊と分れ、根古屋へ向う、部落と過ぎる頃より道も狭くなりようやく山道らしくなる。時たま小鳥の声と耳にしづから目にしみ入るようすは新緑の中と全員生川に到着。

ここは材木が集積され軌道の発着地

とほっている。ここで小休止。

これより一列隊で歩を止め、皆くは軌道の枕木に歩きにくく思いをさせられた後、捲き道に出る。森林帯の中には、さりとつけられたシグサフ径をゆきぐりと登る。

頂上も開拓と思われる頃、こづく雨が降り出した。然し木立の中なので太して濡れない。

今日は次第の雨神社は一緒では無いのにどこほす。モツとも昨年秋の祭体の西神山も前に、にそつにがつ

どうも奥山の万が雨神社にヒリつけられてゐるのかし知れぬ。

今り降つてこないうちに、とビノチと上ける。余程現役共に手調である。

正午少し前に頂上手前の本社に着

く、役員の大武さんは既に到着していた。遊難小屋も社殿も満員なので止むを得ず林の中に陣取り、寒さに震えながら昼食をとる。

好天はうは松久市門と如り、雨神

山、奥父山、富士の山々が望よれる

とかいふことだかこの間にガスで

は全く展望はさかず心配である。

一時、東京へ向むる便に下山開始。神社脇りらしき木立の西尾根を飯盛平を目指して下る。狭い尾根なので先づつかえてなく、進まない。

二時少し過ぎ、やっと飯盛平に出て精立神社に着く。三時半全員揃い

日出度く解散となる。

時間も早いので私達は記念撮影をして橋立の鐘乳洞を見ました。

一時止みそうに見えた雨も依然として降り続いている。

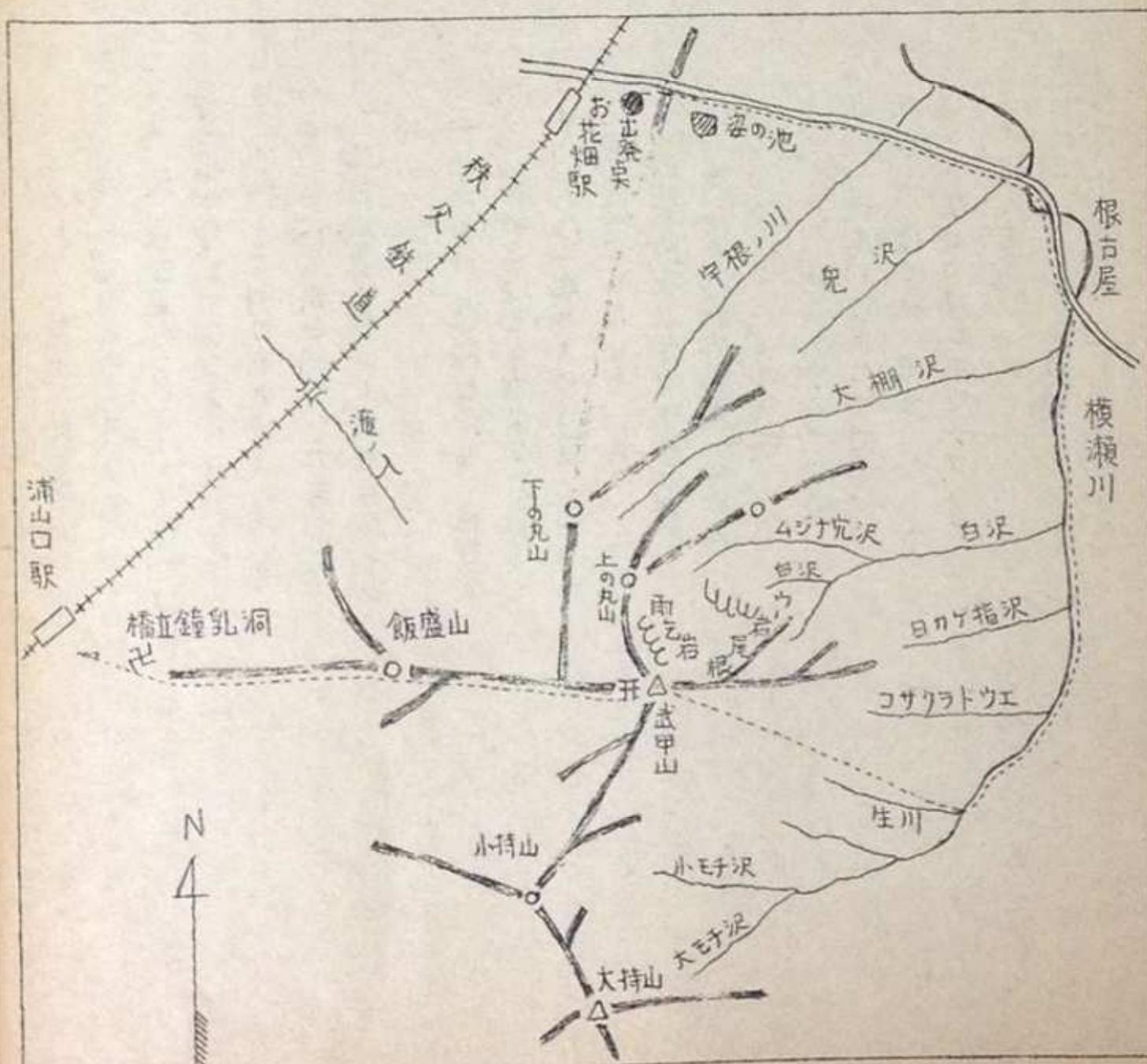
秩父で大武さんと別れ、四時四十分の上野行直通電車にて帰浦。

天候には恵まれなかつたが、盛大に行われた前夜祭、その他いろいろと貴重な体験が得られたことを嬉しく思っている。

のりと — 山彦 —

近代的ヒルティングを建てるにも、科学の辞を集めた原子炉を作るにもノリトをあけ、オハライをしなりてはすませない日本に於いて、もっと近代的な入山式と、と望むのは無理かも知れない。

然し、何処の入山式でも繰り返されるこのアナクロニズム、工夫の余地はないだろうか。山に入れは我々はもっと自然に神を感じるのだから。



鳳凰紀行

五月四・五日 単独行

近藤澄江

(一) ひとりあるき

冷い雨にうたれながら一日を歩き続け、やゝとの思いで鳳凰小屋に辿りつき、その甲斐あってか翌日は素晴らしい秋晴れに恵まれ、鳳凰の稜線に立って生きることの喜びを本当に感じることが出来た昨年の九月を思い、今一度は鳳凰の残雪を踏んであの頂に立ち、最近足を踏み入れたばかりの新しい世界のいく／＼な問題の一端を忘れてしまいたいという気持ちがこの旅の動機であった。

五月三日の最終列車に乗り込み、車外の通路にやっと腰を落着けた。夜半から降り出した雨は列車の窓ににきつけるように降って来た。もう鳳凰は諦めて、ともかく御座石まで行ってそこで先のことを考えようと腹をきめ、再び僅かの眠りに入った。

五時三十分、列車は穴山駅に着いた。途中あんばに降っていた雨も、いつの間にか小雨に代り、枕木でこぼほ

いか屋根のないホームをしつらと濡らしていた。さつまの雨はさては夢だったのかは、と変な気持になる。この穴山駅は南アルプスの有数の登山口を持つ駅であると思つてたのに、意外その客の少いのに驚く。嘗て訪れた時にも三人、今日も女性はカリミ人の外に改札口に前の列車で着いたと思われる三人が朝食をとっているだけてひとりしている。

一度歩いたことのある道の鳥か、身仕度を整えると迷うことなく真直に歩き出す。途中で雨戸を開けたばケリの道端の一軒で、キャンバスを抱えサックの口から三脚をのぞかせている一人の画学生風の人か何やら山への道を尋ねているようであった。私は黙ってそこを通り過ぎる。

穴山橋を渡る頃には今迄の小雨もいつの間にか上り、青空さえ僅かにのぞかれる。ふと誰かの口笛に後を振り向くと、さつきの画学生風の人が信州往還への急坂道といかにも軽々と楽しげに降りているのが小さく見えた。あの口笛で此處までとゞぐのひと、早朝の静かさを改めてさせた。

昨夜の雨に洗われたした、るよくな木々の緑を證つて、平川峠への上りに入る。途中で疲れ足を休めながら、もうこんなに登ったのがと目を下に向けて立つて行った。「お客様、一人かいなし」と後がら声をかけられた。「今日は御座石へ泊るんかい」と前の間にこちらが答える間もない位に訳けて言つた。そつともちかくともつかぬ返事

をしておく。事実この時はまた自分にはこの先はどうするかはっきりしに決断がなかつた。何しろ今日は一日早く出た現役のパーティから下りてくるのに会うまでは登つて行こう。そしてそこでそれからの行動を決めよつと思つていた。「一人ぢやあ大変や、わたしや御座石のむんだか一緒に行きましたうやしといがにも山の人らしい親切忠言を子之ほから歩き出した。私も何とはなしにその彼に従つた。お互に二、三の会話を続りながら歩いて行つたが、二、三の間は次第にひうがり、いつの間にか又一人歩きになつていて。

(二) 御座石鉱泉

まことに沿つた道で一台のトラックが御座石鉱泉まで私を乗せてくれた。トラックから降りて並び込むように御座石の鉱泉宿に入った。もう鳳凰から下りて来た人、これから登るといつ人、此処に泊っている人達で中は忙つていた。これらの人々に混って床に腰をあらし、お茶を飲みながら、私の側にバサッとおかれた登山者名簿と手にヒリ、めくつてみた。「九月二十三日」ときにない字で書いた自分の昨年の筆跡を見ながら、何故かもう此処にゆっくり休んでいることなどりしく、早く登ろうという気分の中に湧き上つて来た。

中に、この宿の一寸パキくした感じの娘さんがある。今日も相変わらずの元気さて登山者に応行していける姿を見て、何かしら安心感のよつほものか私の心をかすめた。昨夜家を出るときに多少心配えは頼をしている母に向つて、「若し一すこても天氣が悪かったら、御座石に泊つてあの元気のいい娘と話をして帰つて来るから平気よ」と言って家を出て来たものだつた。鳳凰の悪い出か私の心の中から消えほい限り、あの娘の印くず消えほいてあらう。しかし彼女はそんなことを知る由もほい。自分で忙しい仕事を手も離さず、「気をつけて行つていうつしゃい」と言つただけだつた。

(三) 凤凰小屋

午後五時、残雪を踏んで鳳凰小屋へ着いた。二つの小屋はいずれも先客で満員である。余りの底れに混雑に構わず中に入つてその片隅に荷を下ろし、何處か湯廻はないかと尋ねにかかる。「ほかへ端処か空かほい。三十分ばかりも」「にしてはいる」と、今迄の疲れも大部これ。それよりアルペン型のテントを借りて来たのである。

小屋の傍の雪を除けた一角にオレンヂ色の我が家の家を染みて、重慶泰山のうちに湧き上つて来た。當時、今迄の自分の行為や現在の自分の姿を何か誇らしき

ものに感しられる。暫くすると団リの多くの視線が私の方に向いているのに気が付く、一寸照れ臭くほつたのてまだ明るいのにあわて、テントの中にもぐり込み、テントの口から僅かに見える外を眺める。舌しかつて今日一日の道を辿りながら、もう今迄の苦しみが樂しみに変わっているのを感じる。

五月始めの山の夜は眠れない程に寒かった。夕方遅く、なってからすぐ隣りにテントと張つてパーティも何やうほそく詰している。耳をすますとやはり寒くて眠れないといふようほこと言っている。寝中電燈で時計を覗くと九時でストップしている。これは困つたと、眠れないと、テントから這い出して、隣のテントに時間を尋ねると十二時十分前。夜空を仰ぐと満月が薬師岳の肩にかかり、黒いヴェールを引いた山々を曇々と照らしていた。月の光に星の多くは姿を消し、たった一つ月の近くで大きく輝いているか印が咲てあつた。

静まりかえた山中の一戻に立て、晴れわたった夜の空を眺めているうちに、この世の中で日本で丁度生きているような神秘的な気持になるのである。

(四) 穂線に立つ

眠れない夜は三時で終つた。凍つて氷同の水を見、テントの裏面のバリくに凍つて音を聞くから、簡単にちこちこ春山のひそめているきひしこを感じ

に。六時、重い荷を背負つて出発。雪は固く凍つて靴が滑り、歩きにくい。ピッケルで身体を支えるようにして歩一歩と登る。容易に歩られると思つて、こいた樹林帶か、慣れはい雪のためかほりく抜け出られず、地蔵岳の直下に立つたときには既に太陽はかなり高く昇つていた。

一と休みの後、一気に鳳凰の稜線に立つ。

地蔵のあの岩塔を見るとき、いつも不思議な感じしか正に呼び起されるのが自分から不思議でならない。いつも山々の裾を包む雲海も今朝ではなく、金無川の一戻が朝の陽光を反射して小さく光つてゐるのが見える。

雲海は山頂と麓とを切り離して山頂の偉大さを讀み、そこには山頂と麓とに巣の村々とは繋りのない別世界に居るようほんしを与え、一方、雲海のない日の山頂は遙かほど下まで見下すことを可能にして、辿り至つた一步一步の偉大さを感じさせうる。いずれにしてもこれは山頂に立たなければほほ笑むことの出来ない、小こほ人の誇りであり大きくなむのである。

対岸の日根三山は豊富な残雪とつけ朝日に輝いている。遠く南アルプス峯が白く聳え、冬山のこじしてかまた残されていいるよつに感しらる。

傍を通り直さに何処かのパーティの一人が言つていて、「あい、2度だせ」。此時始めて外氣のみに心を飛散した。本当に寒い。持つて来た衣類を全部身につけ、その上

いサツクと背負って歩いても一向に暑さなど感じなか

に。それよりも荷物を下ろし後線に立って、谷から吹

上りてくる風を受けていると涼しいよりも寒くなる。

快晴の下に、限りなく連なる山のみを見、岳樟の幹の

、くれだ、に薄片が微風に吹かれて歌うかすかな音楽

聞き、足もとに残雪を踏み、その日に心の底から洗

ぬめられるのを感じた時、山は私にとって楽しいより

有難いものという気がするのであった。

(五) 夜叉神峠

夜叉神峠への下りは、辻山から枝立峠のあたりまで豊
は残雪が直立埋めて走っていた。始めのうちには敷えて
にか後には敷えきれぬ程滑って転んだ。

静まり返った樹林帯の中を、稀に見かける指導標に従

く夢中で下った。

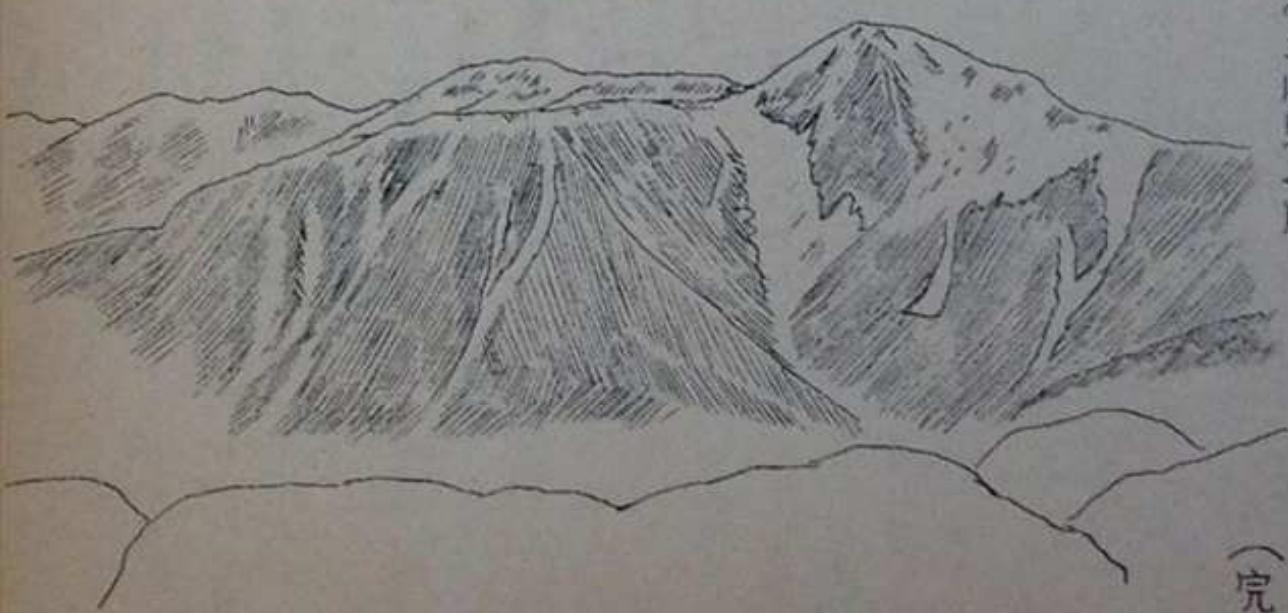
すぐ下であった。

最後にもう一度ふり返ると白根三山は大きくてそり

出して迫つてくるように見えた。

(完)

鳳凰より見た白根三山



へんほことを考えて下っているうちに右手に重ひ白根
山を見つめに。間もなく人声も聞こえ、夜叉神峠は

さすらい

さすらいの 旅にしあれば
岩蔭の 名も知らぬ花
いたく なつかし

岩面より したたる水の

流れでは 果てしなき旅

やすらいの 何処にあらん

細々と 峯より峯へ

横たわる 静けき山路

旅心 風のまにまに

さすらいの 旅にしあれば
空をゆく はかなき雲に

声がけて 名残惜しみぬ

(三二年秋 吾妻山にて)

臆病はお前はガスまかせ
單独の俺は風まかせ

(三二年夏 北岳にて)



雷鳥のスケルツオ

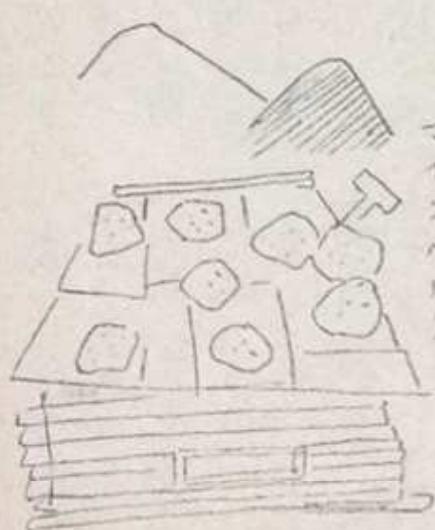
ガスの稜線さまよい行けば

頓馬な雷鳥首を出す

何を見つめる その岩蔭に

エーテルワイスの花が咲く

ひよこひよこ雷鳥何故逃げる
山の男の気は優しいに



今日も

今日は何とか調子があがしいようだ
足が重いようだ
背中の荷がこたえるようだ
息が切れるようだ

体全体がだるいようだ

だけど……

黙って歩いていこう

ほら もうこんなに高くなったり

もう いつものようだ

俺は今日も調子が良いのだ

グーテンモルゲン！

マインベルク！

白毛内山

（その一）土合—白毛内—笠ヶ岳—蓬崎—土合

ヘメンバー／＼柿沼博・山縣昌彦・筒井滿栄・他一名

（五）五月二五日（曇時々雨）

積雪期にスキーを担ぎ上げて宝川へ滑り込もうとしたのに失敗しに引かか、りもあり、他方石榴花の尾根を歩きながら谷川岳東面にまには遠くからんじり眺めをもつとか、又、湯檜曾川源流を一周りしほから便察しようとか、いうく欲張って此の縦走が計画された。

天気は絶好とは申しかねる状態で、日が射すかと思へばパラ／＼と落ち

てくるといつ不安定な空ではあったが、ウツボギ沢、大石沢、ナルミズ沢等宝川へのルートもほつきり介り、笠ヶ岳頂上からは利根源流の山々から魚沼三山へかけての白い山好みが空まれて

最近手が付けられたばかりのその方面への心のうすき大なるものがあった。

石榴花は例年より早いようで、中腹以下では既に色あせ、稜線ではまだ蕾もいくつかあつたが、全体としても一週間も早く来た方が良かつたろうと思われた。こぶしは今か盛りてその清



楚の純白の花弁は印象的であった。

清水峠では越後側からの農場に包

まれ、雪深て寸断されている旧道を下るのを止めて、稜線沿いに七ツ小

屋山を経て蓬崎へ出した。この稜線には、かなりガスの濃い時でも一寸目

をこらしていれは見付かる程度の間隔に高い鉄の柱が標識代りにすっと立てられて、いうから迷う心配はなし

そりだ。

天気が良ければ大源太山の奥壁によく見ておくつもりについたが、カスの合間に東面のバントが残雪で白く横に走っているのか認められに程てあつた。

	着発	着発	着発
土合	4.30		
白毛内山	6.25		
大倉山	6.35		
笠ヶ岳	7.15		
清水峠	8.25		
ジャクソーピーク	9.00		
七ツ小屋山	9.15		
蓬崎	10.15		
	11.00		
	11.35		
	12.30		
	13.00		
	15.00		

	着発	着発	着発
土合			
白毛内山			
大倉山			
笠ヶ岳			
清水峠			
七ツ小屋山			
蓬崎			
土合			

(その二) 白毛門沢

へ日／六月十四日(晴午后雷雨)

山縣昌彦(单独)

すっきりした岩場をもつ湯檜曾川右

岸(谷川岳東面)の各沢に較べ、白毛各沢は、うつそうたる樹林に包まれて地味なためか紹介されることも少なくて訪れる人も稀である。

たゞ豪快峻烈な岩場の感触はないせよ、これらの沢は自今(日)ルートを求めるながら静かな溯行がしつくりと味わえる美において、猫も杓子もとにかく入ってみるのも良いのではなか

うか。

さて、これらの沢に入るルートであるが、湯檜曾川源流、抱返沢、及び大沢は湯檜曾川沿いに新道を辿り、白毛根を少し登って魚留、滝の上部に出てから各沢へ入るのか一般町である。赤倉沢、ゼニイレ沢は新道から湯

檜曾川を適当に処て渡渉して入る外はない。松ノ木沢は土地の人かセソマイ採りや代採に入った僅かな踏跡か湯檜曾川左岸のヤブの中についているが、

柵もなく余り面白い沢ではない。土合から湯檜曾川左岸の道を辿り、東黒沢にかかる、つている銀行券への橋を渡り、沢の右岸沿いの径と白毛門登山口を左に見送って少し行きは、徑は沢に入る。

今号では最も入り易い白毛門沢を紹介する。

東黒沢へは何処から入っても大差は

次才に溯行の気分が出てくる。再び左折すると

四十五〇メ

リの長さの見事

な滑滲が現れ

る。勾配は緩

いがら大した

緊張感もなし

に右岸を登れ

る。

更に続く滑

めを越してや

くと間もなく

右岸に大岩があり、この少

し先で左手か

らや、貧弱な



沢が一本入っている。これが白毛内沢である。実は五万分の一図を見ても白毛内沢の手前に小さな沢（ハナゲ沢）か一本左手から入っている筈なのに、うっかりして途中でそれを見落したため、これが白毛内沢かどうかその時は確信を持てなかつたが、地図で見た距離と歩いて来た距離の見当とからこれを登ることにしたのだった。一つめてみてこゑがハナゲ沢だったら、島もはらぬ畢竟でも抛り込んで尾根に出てしまつつもりで—。

白毛内沢に入り暗く行くとゴルジュ、更に小滝をいくつか越えると15m位の滝（F1（仮称））が現れる。ホールドは乏しいが右岸のヤブ寄りに越える。続いて下段15m、上段10m位の滝（F2（大滝））、水量も豊かで滑めらかは岩肌はない。卓�行は慎重に如かずと右岸の轍を漕ぎ高捲く。大体この沢は両岸ともひっしりと樹林帯だから、危くほ、たら藪を漕ぎて捲けはよい。但し

かき分け、ふんつくりの取漕ぎは相当のアルバイトを強制されるから、何処でもそうだが沢筋をなるべく離れないとが肝心だ。更に小滝をいくつか過ぎると三段には、30m位の滝（F3）、あるいは30mを超えるかも知れないが、下半分が特に要い逆戸のスラブで滝の

かき分け、ふんつくりの取漕ぎは相当のアルバイトを強制されるから、何処でもそうだが沢筋をなるべく離れないとが肝心だ。更に小滝をいくつか過ぎると三段には、30m位の滝（F3）、あるいは30mを超えるかも知れないが、下半分が特に要い逆戸のスラブで滝の

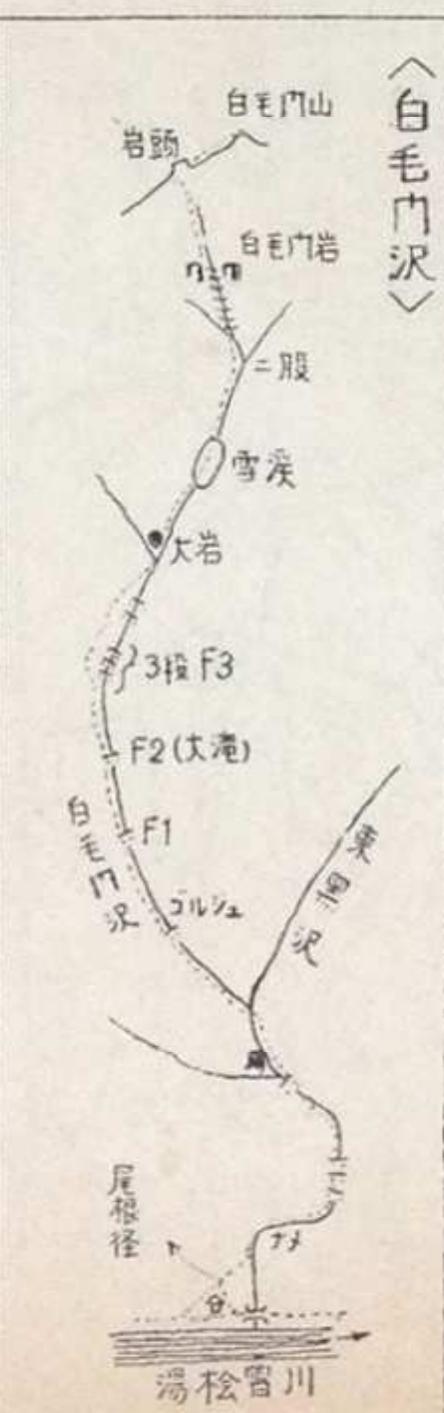
水量も次第に減じ、間もなく泊之残った雪渓が現れる。水のしづくの雪のトンネルを仰る／＼くり、更に廻を穴のあいに雪渓の

トヤされるかな、と苦笑する。落口に大岩あり、この先は二股となるが右手の沢を辿る。

水量も次第に減じ、間もなく泊之残った雪渓が現れる。水のしづくの雪のトンネルを仰る／＼くり、更に廻を穴のあいに雪渓の

トヤされるかな、と苦笑する。落口に大岩あり、この先は二股となるが右手の沢を辿る。

水量も次第に減じ、間もなく泊之残った雪渓が現れる。水のしづくの雪のトンネルを仰る／＼くり、更に廻を穴のあいに雪渓の



上を暫く登って一段と水の減った身に再び立つ。この先で沢は再び分するが、右手は地図1608の三角点万へ行こううほのて左手となる。周もよく見覚えのある白毛門の行手に現われ最後の詰めてある二本の内柱のよつは白毛門岩の向階段状の乾いたスラブを登れば

故郷をせすに白毛内山の稜線に達する

ことが出来る。視角も急に展り、谷

を東西から怖ろしく切り立って相対し

いる。

白毛内山の最高点は直ぐ目の前である。休日にはかなり賑うこの尾根も今は半睡の鳥か自分一人。藪潛きて入は口を開いた汚ないスボンも怖うとろほく投げ出して草むらでトカケさめ込も。突然雷鳴に仰天して目を覚すと谷川岳の向う側から雷雲がくんと拡がつてくる。早速下り始めか途中でパラ／＼始まり予定した松ノ木沢の下降は止めにして尾行を逃げ下りた。

東黒沢に入る 7.00

滑滝上部 7.25

白毛内沢出合 7.40

コレシユ 8.10

F2 9.00

F3(三段) 9.30

大岩の二股 10.00

最後の二股 10.40

↓ (昼食 0.30)

白毛内山 12.00 着発
東黒沢の湯松曾川出合 13.50

書くこと

M・Y

「登山家が早晚いわゆる執筆狂の犠牲とならねばならないのは、天の命するところである」 — A・F・マンメリー —

実際、他のスポーツと比較してみると登山家には筆の立つ人が多い。これは観衆もなく競争相手もなく全くの無償の行為であるといつ登山の特殊性によるのであろう。

「今日は元日に町の人々は僕の最も好きは餅を腰一パイ食い、いやになるほど正月氣介を味つてゐる事だろう。僕もそんな気介が味ひたい。故郷にも帰つてみたい。何一つ語らはくとも楽しい気分に浸れる山の先輩と一緒に歩いてみたまう。それに、それだけに、何故僕は唯一人で呼吸を蒲団に凍るようほ寒さを忍んだのに、何故僕は唯一人で呼吸を蒲団に凍るようほ寒さを忍んで蒲鉾ばかり食つて、歌も唱う気がしない程の淋しい生活を自ら求めるのだろう」 — 加藤文太郎「単独行」 —

登山家の文章は文学的に名文にかどうかは知らぬ。然し少くとも我々の胸を切々とうつものがあるではないか。そして日常身边に山を語る反もほいようほ日、ふと縫いて目に觸れたこのよつは敢行に、「お、友よ」と教わられたようほ氣にもなるのである。自分の歩く山とよりよく見、よりよく理解し、更に又、山を歩き岩を登っている自分自身をよく見て、己を高めよう。そのためには、孤独な山の彷徨者達よ、自分の足跡を、自分の姿を書きこめておこう。



尾瀬

=水芭蕉をたずねて=

〈日〉6月7~8日

〈ナンバー〉村田俊満・齊藤良夫

高須賀重雅・小林敏子

他1名

—齊藤良夫記—

沼田駅で下車して登山客の多いのには驚いた。星空と仰ぎバスの順番を待つていると星野君のパーティに会った。

バスで二時間半、大清水で降りて直ちに三平峠へと向つ。右側のカラマソやフナの間から片品川を見える。

もうコマトリヤウグイスが鳴いている。二時間で三平峠を越し、下ると邱もなくモヤのか、

った尾瀬沼を見えて来た。向いには白い雪を残しに越岳が青空にくっきりと浮かんでいる。長板小屋附近には白い苞をつけたミスハシヨウがあちこちに咲いているが、見頃は過ぎている。今年は五月下旬頃が良かったらしい。小屋の附近の湿地には、リュウキンカ、ウメバチソウ、イワカガミ等が咲いている。私は眠い目をこすりながら見入っていたが、村田君はカラー写真を盛に撮って満足そうである。

沼尻平まで廻り、小さほ鳥居をくぐつて雪沢のある雪崩壁を登つて行く。他のパーティは皆軽装に小道具は露營用具を背負っているのでサックも大きい。特に

女性ばかりも小林さんのかなり大きく見える（坦いでいる人が小さい鳥）。足許には尾瀬沼がキラリ光り、長藏小屋から沼尻へ客と運ぶ船が小さく見える。

中腹から上はずっと雪渓が続いている足袋は滑つて一寸登りにくく、燃頂上附近はハイマツが生い、人も大勢いる。上越の山々にまに雪が残っているのかよく見える。日光自根にも残雪か見え、一方豆仏岳の下には尾瀬原が青田の林に覆がっている。

今日の目的地は温泉小屋である。頂上の粗岩を下り、もう一つのピーグ柴安嵒を越えて温泉小屋へ向つ。雷雲が奥日根の方から湧き上り、二時頃心配していたタ丘がやつて来た。村田・高須賀両君はテントを張るため先を急ぎ、我々も木の根につまづき、雪どけの泥道に滑りながら後を追う。

温泉小屋の茶屋まで行くとニ

つっていた。此の附近にはキャンプ

は食べられなかつた。

がないので弥四郎小屋まで行かね
ば困ることでかつきりする。雨
に降っている。三丈の滝を見るの
を念して弥四郎小屋へ向う。

い雨は向もほくやみ、尾瀬原も視
廣り、ダケカンバの林が美しく見
る。弥四郎小屋もほく／＼大きく
力口一も並んでゐる。その近くに
大學のテントが二つ並んでおり、
このテントもその傍に張られた。夜
は頃又タ立か未て、この渓谷のテン
トは、これ配したか、運を天に任せ
てしまつた。とにかく少々の雨
心配ないというようほテントが我
会にも欲しいものだ。

六月八日

起床四時。どこかで鳴くカツコ一の
声尾瀬原のモヤの中に消えてゆく、朝

村田君は持参の釣竿を見ながら「朝
のオカズを釣つて来ようか」と言つ
いたが、さすがに臆却らしく出かけ
た。後つて殘念ながら尾瀬の魚

七時出発、尾瀬原には延々と丸太の

道が続いている。沼尾川を渡ると竜宮
小屋がある。湿地と歩くとフラシに水
が浸み込む。この辺は中田代である。

あちこちに小さな池があり、その水
面に浮島がたゞよっている。此處いら
は下手に歩くとぶす／＼もぐ／＼てしま
う。重い私は屢々両足をもぐらせて笑
われた。此辺いらにもフタスケ、ナガ
ハモウセンゴケ、イワカミ等が朝の

風にゆられてゐる。

向いには至仏岳の残雪が輝き、並く
の森ではカツコ一が鳴いている。この
よつたな樂園が石しもダムのために消え
てしまうこしひつ何としても惜しい
ことだ。

山ノ鼻小屋着九時二十五分。泊り客が

皆立した後ほの少静がひあつた。

川上川の河原で休み、瑠平へと向

う。径は河原を渡ると直ぐに急になリ

、うつそつたるブナやダケカンバの森
の中に続いていてうす暗い。登るに従
い徑はひとくなり、あまつさえタ立か

始つてからは田ンボの中を歩く事
は泥直となる。

ようやくカラマツ帯を過ぎると
クマザサの原となり菖蒲平へと
なる。名に反してアヤメは見当らな
い。

天気が良ければ此の向つに燧
池に影を映して見える筈だが、か
くため視界はモカガ、人も少く
て静かである。

富士見小屋を過ぎるとトラック
の通りそつとな広い道がすつと下へ
続いている。途中の水場には御丁
寧にも足を洗つて来て下さいとバ
ス会社の立札が立つてゐる。

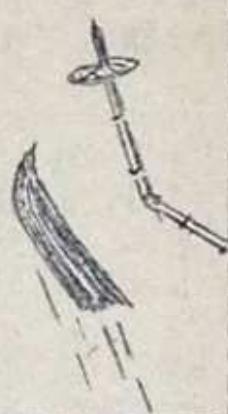
確かにこんな泥んこの足ではバ
スも迷惑するのであろう。

富士見下から最終の臨時（客が
入り切れないため）バスに乗り召
田へ向つた。

帰りの上越線の列車で、谷川岳
の倉のマルゼからの帰りの丁
さん達と共にま／＼一諸にはつた

|| 仲間を語る ||

村田俊満君



そして足の強さにや、舌巻いにものだ。而も劇動で擦つた顔面に元氣と笑みを浮かべて「でも本当に良い気持にほけ」という声は明るく、負け惜しみなどは全然感じられなかったのも、村田さんのあり明るい人柄を現わしているのではないだろうか。

へ語り手／M・T

会が発足しに當時、余り頬馴染みのない私にとつては、山詠会ても皆同じようほ頬かひよこ／＼と現れてくるとしが感じられなかつた。それが昨年三月の丹沢集中の時村田さんがセトの沢のリーターをされたので、やつとひよこ／＼の部類から、あ、あれが村田さんかと認識した。そしてその四月、苗場山のスキー場に御一緒してその猛勇振りを見せるに至つて、その頬もしに目を見張らせられた。

最近は山の道具を揃えるために少しすつ貯金をしているとか。他の会員達も、もって範とすべきはほいにどうか。これから会の発展のために御活躍下さるよう、そして女子会員の指導をも心から御願いします。

へ語り手／四九見照男

何しろこちらは“盲蛇に怖じず”の誇り如くに行きにい一心でついて行つてしまつたのにから、滑降に際しても慎重そのもの。神楽峯からホーリングでやるとつてはいる処を、村田さんは見事なフォームの直滑降でナラ／＼に光っているグラストした雪面をす、飛ばしあつと言ふ間に空中転回、スキーは先端と後部が意見と異にして分裂という次第にはなつたか、その果敢さ、

吉登りにしても、一の舎に入らるるに相当丹念をつくつた

彼は何事もよく研究する男だ。スキー等ても、我々はとかく滑れ、ば良いといつてガムシャラにこゝ滑つてしまつたのにか、彼は斜面の片隅でテール落しをくり返し／＼練習をし、いつの間にかパラレルクリスチャニヤをものにしてしまつといつに興合だ。

う。つまり相当慎重に自分のベースで山に登ってい
言えるのだろう。

奥も相当の腕で、今迄のカラー写真は大抵彼がうつ
のぢやあほいかほ。幻燈器を持っているのも彼だけ
知れほい。最近は引伸機も買って、とかく平らにう
てしまつ岩場や山腹などの傾斜感を引伸のとき再現
工夫をしているそうだ。

を下つて来るとき、我々が曲りくねつたうんこりす
うほ道をテク／＼歩いていると、うしろに居た皆
かひよ、こり前に現われてニヤ／＼していること
がある。つまり近道の名人であるが、これも彼が徑
く研究しこそ歩いていることの証據かも知れない。

語り手／輪留口勇造

は山の道具を買うにもほか／＼慎重だ。ランウス
はうときも、数種類の型について火力（一定量の水を
容器に入れて或る温度まで沸騰させるまでの時間）
燃料消費量を調べさせたのである。

しつとも、こう慎重になつたのは、最初に買ったナ
ルヤスキーテひどい目にあつたためらしい。

始めて買ったナーゲルときだら、実際に寛大で包羅
あり、氷介ても何でも十分に吸収する。買った当
それとも会う人毎に自慢していだか、そのうちパ

ラフインをしみ込ませたり散々せんじに結果、新らしいの
を買うより他なしとの眞理に最近到達したらしい。

合板のスキーも最初は自慢の種であったが、彼は毎年
少くとも一回は初めのため、今こは文字通り合板の貴重な
スキーになつてゐる。

語り手／樋口留男

村田さんは強い、バテた顔を見たことがない。現役の山
行によくついて来て下さったが、いつも重い荷を担ぎ、
O.B.なのに炊事など先に立てやられるのには頭を下が
った。そしていつも明るく円満の人向には波瀾している
。現役が南アヘ入り始めたのも村田さんの代からだつた
と思う。

語り手／俱勞正

眞面目な性格である彼は仕事にも熱心で最近は山へ行く
暇をつくるのに大苦労しているらしい。一人前の社会人
となつてゆくとき、山好きな人間の経験でもほら
ぬ苦しい時期であろう。世間の多くの人達がこの時期に無
償の情熱を失い、脱落してゆく。

然し彼はそれらの人々とは異り、あの美しい心で山を愛
し、山との目に見えない縁をもつてゐると私は信ずる。
現年年令的にも会の中堅である彼にむづら期待すると同
時に、いつまでも仲間でありたいと思うものである。

山と女性

筒井満栄

会も発足して一年半を経た今日、オ

一号の会報のメンバーを見てみると女子会員の大半が名前を消してしまっていいることは大変淋しい気がする。女性であるか故にいろいろの事情もあり、なかなか思つようには会の山行に参加できないのではないか。自分達の会をより良いものに育て、いくためにも、いやそれより、山に対する自分の愛情が日常の俗事に追われていつうちに薄れ消え去ってしまわないようにするためにも、大いに頑張っていいきたいと思う。

最近は幸い新入会者を得、少人故なからも男子会員に負ひないよう張り

切りましようといつ声も出ている。

男性に較べて少人数であるが故に、とかく附録的に取り扱われがちなのであるが、私達女子会員も山に対する意

欲は男子会員と同じように持つてゐるのであるから、会の運営も私達女性の意向をもつと反映するようにお願いしたい。と同時に私達女性も山詰会等でもっと積極的に意見を述べるべきであろう。

さて男性に負けほいような立派な山行を、と言つたか、私達女性は学校を出てしまふと歩く機会も、他のスポーツをやる機会も少くなり、それだけに平常からどんは一寸した機会にもトレーニングをしておかないと体力的に無理になるのはなかろうか。スキーリングにはなるのではなかろうか。スキーをやつたりするとその必要と痛感する。女性はかりてはほいかも知れないが

男性より体力的馬力の少いことからくる調子の良し悪しの差が非常に大きいのである。

少しぐらいオバアちゃんになつても好きな山を歩くことが出来るためには、若さにまかして一時的に無理をするのではなく、平生から身体を調え、そ

して会の中で正しい山の歩き方を修得しておくことが必要であろう。そこでこのトレイニングであるが、何もむざ／＼マラソン等をしなくとも心掛け次第で或る程度は結構出来るようと思われる。

私は大体一日中ビルに閉ぢこめられていのだが、この階段を早足で昇り下りたり（尤も、人に怪しまれまいようにする苦労はあるが）、なるべく乗り物を使わずに歩いて用を足したり、又どこかの職場にもつきもの、慰安旅行の時なども、なるべく歩き／＼をしている。

先日も箱根へ行つたとき、朝皆が寝てゐる間に金時山まで早足行軍をして来た。朝露に濡れた道をウクイズの声に勵され、一人で駆け歩る姿は自分で考へてもおかしくはつた。僅か高差六〇メートルでも駆ければ息もはずむし汗も本る。

然し、今迄に登った山を想い、これら登ろうと思う山を心に描きながら、こういったトレイニングは、他人見れば馬鹿々々しいかも知れない、当人にとってはむしろ楽しいものもあるのだ。

私は人並以上の健脚ではないが、今まで山を歩きたいと思う。この間、緒に行つた現役の女子部員がとても元気なのを見ると、彼女達もやがて我々のメンバーとなり、女子会員の技術もあいかくあがってくるに違うと思う。

小、山行と同時に、山の食糧や衣類の研究等、私達女性得意(?)のセンスを生かして、テーマを持って研究していくこともいい、のではなかろうか。ついでにこともいう／＼話し合ってみたいと思う。

そして会員の名前がいつまでも消えないようお互に協力し、励し合っていきたいと思うのである。

— 山詰会の記録 (4月以降) —

4月4日：山縣氏宅、大武昭雄氏送別会を兼ねて行われた。(23名)

4月27日：辻氏宅、5月連休の山行打合せ。(13名)

5月9日：村田氏宅、市缶連理事会の報告、5月連休の山行報告、廃東缶連武甲集中登山参加者の打合せ、会報8号作成の件。(16名)

6月6日：村田氏宅、(1)会活動の反省……意欲的な山行、基礎的技術の訓練、現役の指導援助。

(2)罰則規定……役員会で検討。

(3)山詰会増設……毎月オ1,オ3木曜日午後7時。
時間厳守の要望強し。

(4)マーク会員証…作成に決定、役員会に一任。

(5)幻燈(尾瀬) (6)山行報告。

(7)尾瀬、谷川岳(-の倉5ルンセ他)山行計画提案。(18名)

6月19日：村田氏宅、(1)尾瀬、谷川岳山行報告。

(2)夏山計画について討論。

7月3日：村田氏宅 (1)山行報告(-の倉5ルンセ他) (2)マーク分配

(3)夏山計画。南了(現役のコーチ)、北ア(白馬一筋高縱走) 谷川岳合宿が提案され、次回山詰会で決定。

谷川岳一の倉沢

中央壁

5 ルンゼ

α ルンゼ



中央壁

高藤良明 記

ほにゆうし知れない。

（日） 5月15日（晴）
（メンバー） 辻勝四郎・高

藤良明

一の倉に入ったのは今日で三度目
でまた／＼経験の乏しい僕には
少しおかは少々荷が重かったよう
にし、誤てあつたと言われるかも
知れない。

天気は一日中素晴らしい
良く晴れていたにもかかわ
らず、全く嫌な登攀だった。
太陽が西の山ほみのかな
たに没しようとしている夕

暮の稜線にやつとの思い
で飛び出しても、その時に
は何うの感激も安心感も湧
いて未だなかった。嬉しくも
はかった。生意気はようだ
かたゞ登るべくして登った
という感じだけだった。自

分自身では不思議なくらい
冷静だったつもりだが、或
いは連続の緊張感がりまに
抜けきつていなかつたのが
も知れない。遙く興奮して

それでも一の倉の出合から、晴れ
わたつに青空をバックにすくとそ
ひ之立つに一の倉の絶壁を見上げた
時には、こすがに圧倒されに。雪崩
に磨かれた岩壁がクン／＼こちら
に迫つて来る……。気味が悪い位に
晴れ上つてゐるので尚更であつた。

駆走している二の沢附近を過ぎる
と雪渓は急に可配を増して来た。今
日は鳥情子スラブと通らずに本谷通
しに登ることにしたのである。ステ
ップ・ハイ・ステップで慎重に登り

からも、迫り来る岩壁に対する何と言はない不安が次第に胸一杯に広がって来て、何度も登って来た雪渓をふり戻りたいと思つたか知れない。

然しその想いも本谷バンドを埋めて雪渓をトラバースした途まで、溪を離れ壁に取り付いたら自然に消して行ってしまった。壁に夢中で不安どの宿るすきがほかつたのであろう

辻さんがトップで三ピッチ位登つて程良いテラスに出たのを手、昼食どころ。気付かばはいううちに時間ももじと過ぎていて、本谷を忠実に登つて、出合から此處まで四時頃強。中休みにしても、一寸時間をくすぎた。昼食もそろそろにファトを出して又登り始めた。然し直に日射しか蔭つてしまつて出しきないファイトを挫かれてしまう。

から一ピッチずつ慎重に登り切らんに大体自尊のつく途まで来たようになつた。時間も時間なりて休む間もなく左へトラバース。残雪を遊びはかり、それでも今日の南稜はほか／＼賊かても中央壁は後にも

先にも我々二人だけ、迷路を立てるも違う立場でもないのでからやりました。この時は全くガツクリ詫てもないのか、今日はいやに時間のにつのか早いのか元に戻る。

左上から落ちて右へハーフペニオンで、草付とヤブを高度感に悩まされは

先乗りの間、行く手はハットレスか隣っこいに。この時は全くガツクリまたか、何とか上に出なくてはならず、せめて掛けねば」と探しにか跡

つけられたらのは直登だけだった。辻さんが慎重に突破、続いてジツ



ヘルニアでこのハットレスに取り付いたが、早く安全な處へ、という人間の本にだけか、疲れに手足を動かしていざるうてあつた。苦悶の末、ハットレスを乗り越え

と、今度は間違いない。鞍縄まで続いているヤブであった。最後の刀をしほして急斜面のヤブの中に突っ込んで行った。

ハ時十分、一つの大さな仕事事を終え、彼の空虚にも似た気持ちで稜線に立つましかった。岩壁に取り付いていた間、どんなにこの稜線を望んでいた知れなかったのに、今その稜線に立て何の感激も湧いて来なかつた。これ／＼、と思つたに付て顔もまた硬つていたよつてある。

西の山の端に沈みかけた夕陽の光がましかつた。岩壁に取り付いていた間、どんなにこの稜線を望んでいた知れなかつたのに、今その稜線に立て何の感激も湧いて来なかつた。これ／＼、と思つたに付て顔もまた硬つていたよつてある。

トて張はし、旧道出合返家つにじきには既にとほりと日は昇つていた。

〈コース・タイム〉

マチガ沢旧道出合	7.30
一の倉沢	7.55
二の沢出合	9.00
中央壁取付	11.20
稜 線	午前 6.10
オキの耳	6.30
マチガ沢旧道出合	7.50

(註)

中央壁は一の倉沢におけるいわゆる中級ルートであるか、ルートファイン

ディングを之誤らばけは取り立て、困難は個處はない。に、のべり附けたこの壁には茹んど特徴的なものが見当らぬ鳥、ルートの指示が難しい。

又奥壁一帯では登攀者が多いものがあつたのに、自分自身に言いきか

トて張はし、旧道出合返家つにじきには既にとほりと日は昇つていた。

岩は一々名の他のルートに較へると極めて脆いが、下部一五〇米程は高度度もあるってす、モリした快適な登攀である。

取付のガリ一から三。ピッチ程の力で左手中に快適な半坪程のテラスがあるが、他には安全は確保されどなるべきテラスは見当らない。このテラスから右にトラバース気味にニッソスケウ右にトラバース気味にニッソスケウナミ。赤) 程行。ために此の壁ではよく、スラブり混つた傾斜の良い草付の登攀である。この草付へのトラバース奥上部に、この壁唯一のハーケンを認めたが、このハーケン上部の壁は要そうであり、この道には三本程のリップが走っているが、いずれも取り付くのが不容易ではない。

我々は相当下部よりミルンセこの中庭リッジに出てしまつたが、茹ん



ヤブであるこのリソシは予期していなかつたにだけに、少くからず幻滅を感した。上部の一坂ルートはミルンセとして、この中面リソシをそのまま、枝吹へつめるようであるが、我々は残雪の上部バットレスに惑わされて交錯するリソシを拾い逃るうちに、ドルンゼル手に出てしまつて予想外の時間費してしまつた。

この辺は滝沢上部に較べるに地形が複雑で、威圧的なバットレスが多く、慎重にルートをとる必要がある。

使用したピッジは三本である。

(辻勝四郎記)

あ、この前日五月一七日、我々二名で二の沢右股へ入ったが、今頃よ雨、而も霰まで降つてきにのせて登手を断念して下った。

5 ルンゼ
(日)六月二九日(曇時々晴)
ヘメンバー、辻勝四郎、柿沼博、山縣昌彦、南井滿宋、龜江寅之、齊藤良則、篠原健二、小山田俊明

五時出発の予定が少し遅れてマチガ沢旧道出合の天幕地を出発。一の倉沢に向う。旧道の初夏の朝は気分爽快である。一行八名の鉄靴と地下足袋の足音が軽快に進んで行く。やがて沢音ひく一の倉沢出合について見上げる。本谷バント附近まで雪渓で埋まりその上部は岩と新緑に美しく彩どられる。そこでバントは雪渓で寝わかれ、そり直下で一痕切れ、更にはるか下方まで雪渓が続いている。正面の滝沢下部の雪に磨かれた垂直岩は黒々とした光沢を放つて無意味に沈黙している。雪渓をへたてた村岸の2ルンゼには既に二、三パーティが入つていて盛んにやっている。遠くから見ると

右岸の踏跡を辿つてしばらく登つてから雪渓に降りると、冷たい空氣と暖かい空気が交互に頬に觸れる。

左手に一の沢の雪渓を、右手に前衛

立沢、衝立沢を見送つて鳥帽子スラブに取り付ける。草鞋にはきかえる。

草鞋は乾いた岩にうまく合つて快よく登れる。先日登つた逆戸の衝立沢スラブに較べるとずっと楽である。一気にスラブを登りきつて南稜テラスに立つて一息つくと、汗ばんだ身体を雪渓より吹き上げる風が快よく冷やしてくれる。はるか下方の湯檜曽川をへだて、白毛門、笠ヶ岳の山々の上品なスカイラインが続(31)き、その左手は眼前の中央稜の絶壁が殆ど垂直に断ち切つてあり、乱れ飛ぶ岩ツバメが軽快に岩とにわむれている。小休止して本谷ハントに降りるとバントは雪渓で寝わかれ、そり直下で一痕切れ、更にはるか下方まで雪渓が続いている。正面の滝沢下部の雪に磨かれた垂直岩は黒々とした光沢を放つて無意味に沈黙している。雪渓をへたてた村岸の2ルンゼには既に二、三パーティが入つていて盛んにやっている。遠くから見ると

のつぱりしに絶壁に見えるが、こんな間にこんな岩溝かかくされていたことと目の前に見て、大自然の妙に感嘆を以てしまはし見どれる。

此處で我々は四人ずつのニパーティに介れて、2ルンゼと5ルンゼに入る予定であったが、2ルンゼは余り人々入っているので止めにし、全員で5ルンセをやることにする。

狭い入口を通して5ルンゼF-1の下に立ち、此處でザイル、三つ道具を取り出し、Yエーンがトップで登攀を試みたが余り水を浴びるので此處は捲くことにする。

6ルンゼとの中間リワードよりに草付を少し登り、チムニー滝F-3の上部に降り立つと、4・6ルンゼとの境界にリッヂが両側より狭ばつて来て、見上げる5ルンゼはほく直線に突き上り一番奥に空が小さく見える。いよいよルンゼに入、にほの感じがする。Yさん達がほか／＼上って来ないので、暫く待つ間、ふり返って2ルンゼの方を見ると、沈没スラブのテラ／＼と鈍く光る岩、その上部のマッターホーン状岩峯、それをめぐるA、B各ルンゼが手にとるように眺められ、カメラに收める。やっこYさん達が登って来た。6ルンゼのチムニーを覗いて来たうしい。

先ず最初の滝はトップのYさん少々水をあひながら右から左上へトラバース式意味に登り、続いてSさん、女子のTさん、と登る。一本のザイルご八人かかるのは相当時間を要するものだ。この滝の岩壁に巣くっている岩ツバメも、人相の余り良くない人間共が岩をこそ／＼登っているので、巣に戾ろうとしては不安そうに去つて行く。そのうちに空が暗くなり、今まで見えていた2ルンゼ方面もすっかりガスにかくれ、ボツ／＼と雨が落ちて来た。そのうちに空が暗くなり、今まで見えていた2ルンゼ方面もすっかりガスに手に取う如く展開され、雨に洗われた。2ルンゼの方向からヤツホーの声が、流れて南稜の方からも叫んでいた。Yさん達がほか／＼登れる、最後詰めて一寸

然の威圧に対する小さほ人間の存在の確認であろうか。

続く滝を登り切った頃より雨も相当強くなつたので、岩かけに適当に入つて思い／＼に一服する。

小やみとなつたので登攀再開、一寸した雪渓をくぐり、チヨックストンをよう、クラソクと登る。滝と滝との間にカレがあるのに気楽に登れる。又雨が降り出す。却つて濡れるのが気にならなくなつて、水の流れをチムニーを水の下になつたチヨックストンを抱えて水を浴びながら登る。やつとや、展けにガレと草付にほり稜線も目に入つてくる。天候も又回復し薄日さえもれて来た。ふり返ると沈没上部の各ルンゼが目の前に手に取う如く展開され、雨に洗われた新緑と残雪が美しく光っている。ニ股に到着、人数も多いので左股を登ることにする。この通りは直当に岩と草付きて、岩は階段狀でくん

したバットレス狀の岩の下に出た。正面は急な草付で岩に繞き、Yさん達は真正に登つて行った。左側にクラックがある。たのてこれを登ろうとしたところサックりこじしてもつかえる。そこでサックを背中からはずし頭上の平らさつに見える草付の上に置いて登つこうとした瞬間、アツと言ふ間にサックが落ちた。トン、トン、と二、三回ハウントして下の人の頭上をかすめ、はるか下方へ飛んで行き、しま、にと思つた。そこは既にその片影と之認めない遙か下の谷間に落ち込んでしまつた。中に入つて、いざカメラとナーゲルは惜しいが諦めようと決心したら、辻さんから「そこそこれると言つて下つて行った。全く自分の不注意でこんなに苦労をかかり、申訳なく思つ。あとで壊れに力メラを見ほから、あの時何故あんなにありあまうめる気になつたかと思つた。南稜から東にらしい三人のパートナー／＼てあったが元氣よく通過して行つた。あとは一ヶ所まで一投足、のんびりと縦走路を肩の小屋まで通り、入もボソ／＼未出した空に追われるように歳剛新道からマチガ沢旧道合に帰る。

うり分らないものを探しにあの岩場を何百米も下り又登つてくるアルバイトの量が大きくなりに作用したからかも知れない。

此処の岩（犀岩とか）を登つて、登り赤い方を下り返り、足下に突きつこして立つ鳥帽子岩を見下し、周囲のすばらしい山々、オキの耳等を眺めているときも、辻さんにこゝに苦労をかけてしまって気がかりである。然しそるが下方に小さく人間の姿がサックと背負つて現われ、それから自分のだと認められたことはほつとして、ふくも見付かつたと感謝した。

稜線へ出て幽の沢を見下ろし下ら食事とどうときは、さうかに無事登れた安じと勞働で腰がペコ／＼てあった。柿沼博・條崎介二

この日は折重しく縁と雲表山岳会がコップ状をやつており落石がひどく、更に我々より先にミレンゼに入つた。更に我々より先にミレンゼに入つた。縁の連中がF5で壁東側、僕といふ始末で時間も喰い、止むなく我々もF1から退却した。鳥帽子ラフ方面に駆け、衛立沢方面は全般にかくら裏、出發も早めに、そして慎重に入りたい。完登は次の機会まで残ることか云う。見付かるほど

<コース・タイム>	
マチガ沢旧道出合	5.25
トントン	7.00
谷線	7.30
倉岳小屋	12.00
のの	13.30
マチガ沢旧道合	14.00
	15.00
	16.30

全く忙くて参りました。それに今回は鹿嶺の集まり

も全く苦労しました。次号からは場塞子を追かせない

ように願います。

山行報告は四月から六月までの間ですが、五月の連休以外には休みもこれないせいか、大きは山行はないようですね。その代り、若い人達が大部西丹沢あたりの合宿に参加し基礎技術の習得に励んでいるようで大変

結構です。この期間には合同山行は出来ませんでしにか、この夏には全員合宿の山をやりたいものです。

すさまじい登山ブーム、何も我々だけの山ではない

のですから誰が行こうと文句を言つ權利はありませんが、こう登山人口が増えて来る事自然、人に余り知られていねい、人の行かないバリエーションルートを

自分で研究して行くとか、或はシーズンオフを狙ったり、冬山に主体を置いてくるのか芸人の行き方ではないでしょうか。そうほっこると、やはり

会に入つてみ、ちり技術を身についておくことが必要になります。そういうた心構えでこれから山行も計

画したいものです。

冬山の合宿、これが我々会に譲せらるてゐる西面の目標でせう。それにつけても先ず問題は聚居です。他の会では冬用天幕購入のために資金カンバをやっています。所もあります。我々会でも如何でせう。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

二度から夏山を迎えるとしているのに話は冬に飛んでしまいましたが、この夏も吉野駅近く直渓は山行を積んで下さり。皆さんの山行に幸多がんごとにこれから祈ります。

毎度の貴会の会報御送附有難うございます。
今後ともよろしく御指導下さい。

溪棲山岳会

各山岳会殿

溪棲 オ8号

発行日 昭和33年7月17日

発行所 溪棲山岳会



1958. 7.

溪穂山缶会